

赤煉瓦倶楽部舞鶴							
会報131号 令和7年(2025年) 7月10日							
「赤煉瓦倶楽部舞鶴」ホームページ http://www.redbrick.jp/							

赤煉瓦倶楽部舞鶴 会報			
発行人/会 長 吉 岡 博 之			
編集人/ 小 野 章			
〒625-0062 舞鶴市森973 番地の1			
FAX/0773-63-9764			
E-mail brick7388@yahoo.co.jp			

目 次

1. 令和7年度通常総会報告	4. 舞鶴の水道を巡る(第4回)
2. 第13回近代遺産視察旅行の報告	5. 図書のご紹介
3. 旧丸山小学校の保存活用への新たな風に期待	6. 神崎の煉瓦工場ミッシングリンクへの手がかかり
	編 集 後 記

1. 令和7年度通常総会報告	吉岡博之(会長)
----------------	----------

令和7年5月10日(土)、令和7年度赤煉瓦倶楽部舞鶴の通常総会を開催しました。以下、5議案を審議し全員異議なく承認されましたので、その概要を報告します。

第1号議案 令和6年度事業報告 (会報で主な事業は報告済みのため省略します)

第2号議案 令和6年度決算報告 以下の通りです。

収入の部

科 目	金 額 (円)	備 考
1 会費収入	43,000	個人45名、次年度前納等含む
2 事業収入	1,126,700	海軍レシビ販売、視察参加費ほか
3 寄付金収入	7,500	寄付金
4 雑収入	157	受取利息
当期収入合計	1,177,357	
前期繰越正味財産額	457,618	
収入合計 (B)	1,634,975	

支出の部

科 目	金 額 (円)	備 考
1 事業費	945,305	海軍レシビ印刷、視察バス代ほか
2 管理費	195,662	旅費交通費、会報印刷費、労務費ほか
—	—	—
—	—	—
当期支出合計	1,140,967	
当期支出差額	36,390	(A)-(C)
次期繰越正味財産額	494,008	(B)-(C)

第3号議案 役員の選任

以下のとおり、役員選任を行い新役員が選任されましたので、会員皆様のご支援ご協力をお願いします。

◇令和7-8年度の役員名簿

理 事：石原雅章、馬場英男、梅本徳夫、日向 進、吉岡博之、川崎修洋、小野 章、隅垣とし子、嵯峨根八郎

監 事：森口等史、言上洋海

◇会長及び副会長等の選任 総会終了後ただちに新理事による理事会を開催し、会則第6条4項の規定に基づき、以下の通り、会長、副会長、会計を互選しました。

◆会長：吉岡博之 ◆副会長：梅本徳夫、川崎修洋 ◆会計：石原雅章

第4号議案 令和7年度事業計画

「赤煉瓦倶楽部舞鶴」は、平成3(1991)年に発足して以来、赤煉瓦ネットワーク等との交流を育みながら、多くの市民とともに、市内の赤煉瓦建造物の保存と活用への取組を実践し、「赤煉瓦を活かしたまちづくり」を推進してきた。

一方、当倶楽部は発足以来、上記の「赤煉瓦を活かしたまちづくり」を活動の柱に据えてきたが、赤れんが周辺まちづくり事業を進める市行政と赤れんがパークを運営する株式会社ウッディーハウスや一般社団法人舞鶴観光協会のご努力により、赤れんがパークは大きな賑わいを見せている。また、今般、近代化遺産保存センターが設置されたことで、市内の赤煉瓦建造物をはじめとする近代化遺産の保存についても将来の方向が示された。

したがって、当倶楽部は所期の目的を一定程度果たしたことから、令和7年度末の解散に向け取組む。

第5号議案 令和7年度事業会計予算 以下の通りです。

収入の部

科 目	金 額 (円)	備 考
1 会費収入	0	個人42名
2 事業収入	896,000	視察参加費、海軍レシビ販売ほ
3 寄付金等収入	1,000	寄付金
4 雑収入	1,000	受取利息
当期収入合計(A)	898,000	
前期繰越正味財産額	494,008	
収入合計(B)	1,392,008	

支出の部

科 目	金 額 (円)	備 考
1 事業費	803,000	視察費用、海軍レシビ印刷ほか
2 管理費	167,000	会報印刷費、労務費等
—	—	—
—	—	—
当期支出合計(C)	970,000	
当期支出差額	-72,000	(A)-(C)
次期繰越正味財産額	422,008	(B)-(C)

【お知らせ：令和7年度以降は、会費を集めません。】

2. 第13回近代化遺産視察旅行の報告

視察企画チーム

さる6月3日(火)に兵庫県の姫路市への近代化遺産視察旅行を実施しました(参加者24名)。あいにくの雨の中、朝7時にバスは東舞鶴駅前を出発し、舞鶴道・中国道・播但連絡道経由で姫路に到着、10時半過ぎに旧陸軍第10師団師団長官舎(現カトリック淳心会本部)に到着、1945年の姫路空襲の被災を免れたこの建物を見学しました。舞鶴や横須賀・呉では旧海軍鎮守府司令長官舎は保存されていますが、旧陸軍の師団長官舎は、第16師団長官舎(京都市伏見区)も1990年代末に解体されるなど、保存された例は少ないようです。

その後歩いて姫路市立美術館を訪問、折から開催中の姫路市出身の世界的服飾デザイナー高田賢三の展覧会を参観しました。この美術館の建物は、旧陸軍第10師団の煉瓦造りの兵器庫(西館)と被服庫(北館)から成り、各々1905年、13年に建設され、戦後は1947年から80年まで市役所として使用されていました。その点は、旧海軍の倉庫を一部使用していた舞鶴市役所と共通点があります。

西館と北館は、1983年開館の美術館改装工事の

際にL字型に繋げました。更に北館内部は2階床・天井等の木製骨組みを撤去、新たな躯体を設置し広大な空間を作りました。使用煉瓦は、舞鶴市立赤レンガ博物館と水野信太郎博士の協力で、刻印などから岸和田煉瓦や大阪窯業の製品と判明しています。同館は2003年国登録有形文化財に登録されました。

その後一行は、徒歩で兵庫県立歴史博物館へ移動、兵庫県のあらゆる分野の歴史を物語る展示品を参観しました。城下の一帯は旧陸軍の用地で、戦後復興時には市役所、病院、学校など公共施設が集中したものの、現在は広大な緑地なども整備され、無電柱化も図られるなど、優雅な雰囲気すらあります。

一行が昼食をとった「姫路モノリス」は、1930年に建設された旧逓信省姫路電信局別館の建物を保存活用した施設で、先の大戦の空襲にも耐えて国登録有形文化財に登録されています。

昼食後一行は、大手門駐車場前の店舗で土産を購入後、書写山ふもとに移動、ロープウェイとバスを乗り継ぎ、西国27番札所円教寺の摩尼殿を参拝したあと、姫路を後にしました。



旧第10師団長官舎（淳心会本部）



姫路市立美術館



高田賢三展（美術館北館内）



旧逓信省姫路電信局別館



兵庫県立歴史博物館にて



円教寺摩尼殿を望む

4月27日、旧丸山小学校で「竜宮マルシェ」が開催され約500名もの来場者でにぎわった。1998年3月に122年の歴史に幕を下ろし閉校したが、27年振りに地元住民の企画により行われた保存を目的としたイベントは初めてだと思う。

昨年3月に、三浜区出身の大西紗生さんから小学校先輩の徳永明夏さんを紹介された。旧丸山小学校の価値と保存活動について説明したが、卒業生として保存活用の必要性を強く感じたようであった。その後、校舎をツタが覆いつくしていると当会吉岡会長から報告を受け、8月の猛暑の中、ツタの除去作業を行う事とし徳永さんを作業に誘った。当日は、筆者、梅本徳夫さんと徳永さんの姉妹との4人で作業、作業後に校舎内に入るが、彼女は閉校後初めて見たという校舎内の荒廃さに大きなショックを受けた様子であった。その後、彼女からの連絡も途絶えていたが、今年3月に突然、4月27日に今回のイベントに是非来てくださいとの連絡があった。チラシが届いたのは直前だったが、ずいぶん時間をかけて企画したと分かる素晴らしい内容のものであった。イベント当日、三浜・小橋両区の住民のほか、卒業生らが集い楽しい表情が印象的であった。私人として参加された鴨田市長が「校舎を残す選択は大いにある」と話されたことが朝日新聞に掲載されていた。さわやかな風が吹き抜けたようで、ようやく我々の任務も終わったのではと感じた瞬間でもあった。

筆者がこの木造校舎に関わるきっかけとなったのは、舞鶴市役所に勤務していた際、三浜・小橋地区に公共下水道事業を進めるため、地元説明に苦心していた約30年前に遡る。当時の竣工式のパンフレットによると、事業着手が2000年11月であるので、小学校閉校直後に計画策定に着手したと記憶する。特に課題となったのは、下水処理場をどこに建設するかであった。両区の対応は異なり、小学校跡地に建設容認と反対に分かれたのであった。筆者は

当時一貫して舞鶴市唯一の木造校舎を残したいとの思いが強く、また、竜宮浜海水浴場近くの観光地でもあるので、可能な限り人里離れた場所を捜すよう協力要請していた。幸い、希望通りの処理場用地が確保でき、4年半の歳月を経て事業が完了したのであった。今でも忘れられない懐かしい思い出である。

さて、当会の関わりであるが、永年の赤煉瓦を活かしたまちづくり活動の成果として、舞鶴赤れんがパーク整備も順調に推移していたことから、新たな取り組みとして旧丸山小学校の保存活動を行う事とした。2013年に三浜・小橋区と保存活用について協働しようと接触を試みた。良い感触を得ることが出来ないまま自主的に校舎内外の清掃作業を継続することで理解を深める方針とした。校舎裏手に繁茂する竹や樹木の伐採、校舎内外の清掃作業を2014年までの2年間で10回にわたり実施した。その間、舞鶴高専生や両区の役員が参加する事もあった。

また、舞鶴高専より、生徒が全国高専デザインコンクールに応募する対象に、旧丸山小学校の保存をテーマにしたいと協力要請があり、現地視察等を行った。応募したのはグラウンドに設置する「みんなの小屋」で、審査員特別賞に輝いた。その後舞鶴高専において予算化し木製大型ベンチ「まるやまベンチ」を建築することになり、当会も協力し2017年2月に完成した。今回久しぶりにベンチに座り、多くの人で賑わう様子を眺め当時を感慨深く振り返った。この保存活動に毎回参加していた世良孝さん、森口清滋さんが残念にも鬼籍に入られたが、この賑わっている「竜宮マルシェ」を一緒に眺められたらどれだけ良かったであろうか。

徳永さんらは、今年の夏にもマルシェを計画したいとのことなので、開催を楽しみにしている。若者による新たな風により、旧丸山小学校の保存活用が進展する事を期待したい。



（2025.4.27 賑わう「竜宮マルシェ」）



（2025.4.27 「竜宮マルシェ」体育館でジャズライブ）



(2013.7.7 校舎裏手の竹伐採後)



(2013.7.7 校舎裏手の竹伐採作業の梅本・世良さん)



(2013.10.4 自主的屋根雨漏り調査、修理見積)



(2013.12.7 校舎一階廊下天井の様子)



(2013.12.7 校舎廊下清掃作業中、田中さん)



(2014.6.21 舞鶴高専生、地元役員らと清掃作業)



(2014.6.21 清掃作業後の記念写真、高専生・世良・森口さんら)



(2017.2.24 まるやまベンチ完成記念式)

桂取水堰堤のようにコンクリート構造物の表面に張石を施すのは、鎧を着せるようなもので、激しい水流や土石によって削られるのを防ぐためだと思われます。マッシブな構造物はコンクリートで作り、さほど強度が求められない砂防堰堤は石積みで、また北吸配水池の導流壁のような複雑な構造物は煉瓦積で、様々な工法が採用されています。国内での鉄筋コンクリートの施工は明治36年に琵琶湖疎水で初めて使われたので、鎮守府開庁の頃はまだ時期尚早だったようです。

その点煉瓦積は品質管理や運搬が容易で、現場での複雑な形の施工もしやすく、ことに山中での施設築造には向いていたのかも知れません。吉村長策は昭和2年の土木学会講演で、長崎市に水道を作った当時（明

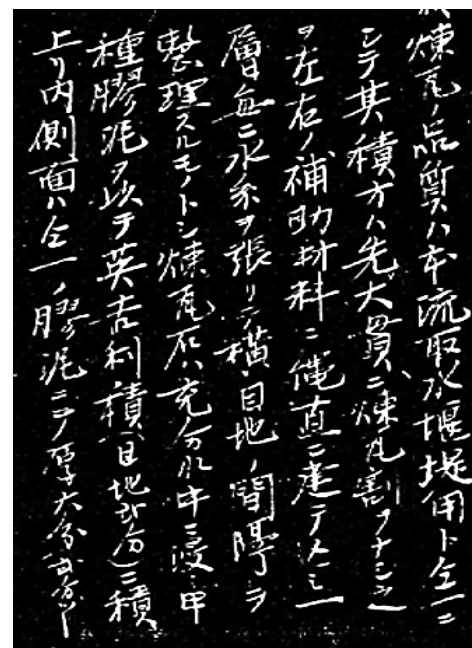
（北吸1号配水池の煉瓦積導流壁）



治24年完成）の話として「工事材料は主として煉瓦石を使用する事となり、監獄内に煉瓦窯を築き囚徒をして煉瓦を制作せしめました」と述べています。それにしても国家事業とはいえ、建設は驚異的なスピードで進められました。

なお明治38年増築時の工事仕様書では張石は城山産花崗岩と指定されています。浄水場構内の石積みなどでも城山官林から採取とされていて、それがどこなのか、いま調査を進めているところです。また当初経ヶ岬から切り出されたことも最近確認できました。工期延期に係る他の文書にも「大洋に突出した場所から切り出すため、天候に左右され納期に間に合わない」旨が書かれています。では煉瓦はどこからきたものでしょうか。

（岸谷接合井煉瓦積の施工仕様書）



5. 図書のご紹介：「フランク・ロイド・ライトに学ぶ50の建築レッスン」A・ベッキー他著 グラフィック社

ライト（1867年～1959年）は日本では、帝国ホテル、自由学園明日館、旧山邑邸（現ヨドコウ迎賓館）などの設計で知られた米国の建築家ですが、本書で紹介されている作品は、主に広大な米国で建てられたものです。見渡す限りの平原の中に佇む建物の中は広々としており、石材や煉瓦による壁や床は南北のネイティブアメリカンの意匠を受け継いでいるものもあります。専門的な「建築レッスン」は別として、写真を見るだけでも、日本に残る作品とのスケールの差が判ります。本書は市図書館にあります。（本体2,900円）



さる4月25日から3回にわたり京都新聞に連載された西村亀三（1873年～1954年）の評伝に関心を持ち、その資料となった書籍「夢の七十年—西村亀三自伝」（平凡社刊、市立図書館収蔵）にあたったところ、旧雲原村（現福知山市雲原）出身の彼が、舞鶴市西神崎の煉瓦工場の発足に重要な役割を果たしていたことが判りました。従来この工場の開設経緯は特に起業に係る経緯が分かりにくかったのですが、この本によって西村亀三が深く関わっていることが示されたので寄稿することにしました。15年ほど前に出版された冊子「神崎煉瓦ホフマン式輪窯」（改訂版・舞鶴文化教育財団刊）の記述も併せて記すと以下のように「類推」できます。

○

志の高い青年実業家であった西原亀三は、明治31年福知山に陸軍の歩兵第20連隊が開設されると見越し、29年頃から京都の竹村藤兵衛、東京の薩摩治兵衛などに出資を仰いで、用地買いを行った。更に両氏に対し、海軍舞鶴鎮守府開庁やそれへの接続鉄道の建設が見込め、大量の煉瓦需要が生じることから、舞鶴で煉瓦製造を開始してはともちかけ30万円出資の同意を得た。余剰の煉瓦は宮津港を通じてロシアのウラジオストクへ輸出できるとも考えた。

西原は技師と共に由良川沿いの工場用地を探し、明治29年9月に河口の西神崎の土地（1万坪）を竹村藤兵衛名義で購入、煉瓦用の土も高津江産に決めた。その後西原（時に24歳）が支配人、京都市深草在住の煉瓦工場主・木村（山田）宗三郎が技術責任者として着任、元村長の人物を会計にして「京都竹村丹後製窯所」を設立、工事に取り掛かり、30年9月から登り窯で煉瓦製造を開始した。

明治32年には2年後に開庁が迫る舞鶴鎮守府の施設建設に向けて、「神崎煉瓦工場」（のち

山田煉瓦工場）を新設した。35年10月28日に会社の所有権は、山田宗三郎に移された。なお、登り窯がホフマン式輪窯に改造されたのは、大正末期とされる。

西原自身は、明治31年から34年まで舞鶴鎮守府の建設に要する人手（労働者）の調達などに携わり、特に日本海側の各地域から広くこれを集めた。

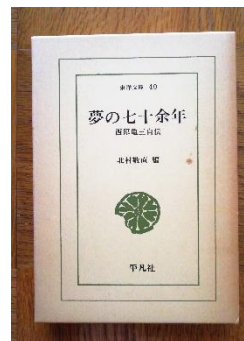
○

「類推」は以上の様な筋になります。要は、野心満々の青年であった西原亀三が神崎での煉瓦製造事業のそもそもの火付け役であったことや、また、その様な彼だからこそ、煉瓦工場の開業資金を全国的に著名な実業家に仰ぐことができ、実現に至ったのだと考えた次第です。

(注)

竹村藤兵衛（たけむらとうべえ）：1831年～1901年
京都市出身の実業家・衆議院議員

薩摩治兵衛（さつまじへえ）：1831年～1909年
滋賀県豊郷町出身の実業家、木綿の商いで財を成した。孫の治郎八は事業を継がずパリで暮らし日仏文化交流に尽くした。



西原亀三自伝



自伝中の西原の肖像

さる5月に舞鶴文化教育財団理事長の高橋照氏が逝去されました。高橋氏は生前神崎煉瓦ホフマン窯の保存活動に多大な貢献をされました。ここに同氏の多年にわたるご尽力に深謝し、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

姫路市立美術館は旧陸軍の煉瓦倉庫を活用しているが、戦後30年以上も市役所として利用されていたからこそ、解体されずに残ったといわれる。姫路の古地図を見ると、多数の旧陸軍の倉庫があったが、空襲や戦後の街区整理で消えた。舞鶴市も戦後旧海軍倉庫を市役所の一部として利用し、現在も範囲を広げ活用している。舞鶴では、長く煉瓦倉庫は暗い時代のものであるという印象があったのを、今こそ保存すべき宝物だという意識が、下からの運動によって覚醒されたのだろう。かろうじて倉庫が2棟残った姫路市よりは、幸いだったのではないだろうか。さて、1945年3月に時の姫路市長は、市役所の重要書類を耐火性ある市公会堂に避難させたが、それは先般当倶楽部視察団が昼食をとった旧逓信省姫路電信局別館の横にあり共に空襲を耐え抜いた。その2年後に市役所は旧陸軍の倉庫に移転した。